

デラクルスカ派の詩における
感受性のイデオロギーと十八世紀メディア

田久保 浩

The Ideology of Sensibility in Della Cruscan Poetry
and the 18th Century Media.

TAKUBO Hiroshi

言語文化研究 徳島大学総合科学部

ISSN 2433-345X

第 25 巻 別刷 2017 年 12 月

Offprinted from *Journal of Language and Literature*
The Faculty of Integrated Arts and Sciences
Tokushima University
Volume XXV, December 2017

デラクルスカ派の詩における
感受性のイデオロギーと十八世紀メディア

田久保 浩

The Ideology of Sensibility in Della Cruscan Poetry
and the 18th Century Media.

TAKUBO Hiroshi

Abstract

The boom of Della Cruscan poetry which developed on the pages of the British daily newspaper, *The World*, in the late 1780s is a remarkable phenomenon in many ways. First, it is notable as a media phenomenon made possible by the development of print media and journalism in which anonymous writers, both men and women, contributed their poems thereby forming a dramatic discourse. The discourse thus formed was one that every reader felt participating in. It is comparable to modern discourses on the Internet in which a phenomenon called *viral* takes place, where a YouTube or Twitter site have access from a huge multitude of media audience in a very brief period. Second, as a literary history of Sensibility which is known for Gothic and sentimental novels and verse that prepared the way for Romanticism and its major writers like Wordsworth and Byron. Third, in its ideological aspect pertaining to the discourses in feminism and revolution, as many women contributed to the newspaper as writers and as readers, which invited censure from conservative critics, also as many of the chief contributors to the Della Cruscan poetry were sympathetic to the cause of the French

Revolution, which was alarming the conservatives as well. This paper aims to show that those three aspects were inseparably involved in its discussions on how the media, the sentiment, the literary expression, and the ideology interacted each other. Those relationships will reveal a particular history of ideas in the late 18th century that seems to have been erased in the later accounts of the literary history of the 18th century and the Romanticism, as we see in the neglect of a great number of important women writers active in those periods.

産業化の進展とともに十八世紀は、日刊、週刊の新聞発行の大きな発展を見た。十七世紀以来、様々な各紙が創刊、廃刊を繰り返して、短命に終わる新聞が多いため、正確な数はつかみにくい。ハナ・パーカーは、1720 年前後において、ロンドンで十数紙、地方紙として 20 ほどの新聞が発行されていたものが、十八世紀末までに地方紙 70、ロンドンで 23 以上に増加していたとしている (29-30)。特に発展が著しかったのは“Advertisers”と呼ばれる広告や情報記事を中心とした新聞である。劇場、陶器、家具や高級日用品、薬品、書籍、求人広告、入札の告知、あるいは株式市況、貨物船の荷揚げ情報、政治状況や著名人の近況について二つ折り 4 ページの紙面に詰め込んだもので、こうした国内外の情報を人々は競って追い求めた。広告で効能の怪しい薬が広告欄にぎわす当時の状況は、たとえば現代のテレビショッピングでのサプリメントの誇大宣伝を思い起こさせ、メディアと消費の関係を見るうえで興味深い。特に 1770 年代以降、商品経済の発達とともに、商品の全国的な流通、販売を可能とするためには地方紙での広告が欠かせなかった。こうして広告を中心とした現代の消費経済の原型が出来上がってゆく中で、イギリスにおいて新聞は史上最初のマスメディアとなったのである (Raven 137)。本稿では、こうして出現したマスメディア上での興味深い現象として、1787 年から 2 年間ほどの期間、ロンドンの日刊紙 *The World* ら数紙を舞台に展開された、デラクルスカ派と呼ばれる男女による新聞投稿の恋愛詩のブームに注目する。このブームは三つの側面で興味深い。第一に現代のインターネットでツイッターやユーチューブ・ビデオにアクセスが殺到する現象——ヴァイラル (viral) と呼ばれる現象——とも比べられるような、互いに面識のない者同士がペンネームを用い匿名でメディア上に自然発生的にディスコースを発展させ、人気が集まるというメディア

現象としての側面。第二には、イギリスの文学史において、デラクルスカ派の詩の表現には、ゴシック小説なども生み出した十八世紀の感受性 (Sensibility) の思潮の端的な例が見られること。恋愛を始めとする感情や自然に対する感受性が、イタリア詩の影響のもとに、より変化にとんで自由な詩のスタイルによって表現され、これが、ワーズワース、コールリッジ、バイロン、シェリー、キーツら、ロマン派と呼ばれる詩人たちに受け継がれてゆくという文学面での重要性である。第三に、カウリーやメアリー・ロビンソンら、多くの女性詩人が大きな役割を果たしていることと、これら詩人の多くが同時に、反奴隷制、反戦、フランス革命支持のリベラル思想の持主であったことから、後に王党派の主要な評論誌『クォーターリー・レビュー』の主幹となるウィリアム・ギフォードら保守派の論陣から激しい攻撃にあったという事実の示すイデオロギー的な側面である。本稿においては、これらデラクルスカ派の三つの側面について、それらが相互に大きな関連を持っており、現代のメディア理解のためにも興味深い示唆を与えるものであることを示したい。

1. 十八世紀イギリス出版メディア

(1) 新聞紙上の劇場空間

デラクルスカ派の中核となったのが、ロバート・メリー (Robert Merry, 1755-98) である。彼は父親がハドソン湾会社の総督を務める裕福な家に生まれ、ハロー校からケンブリッジ、クライストカレッジに進むも中途退学し、近衛騎兵旅団の士官となる。派手な生活で借金がかさみ、除隊した後数年間、ヨーロッパ各地を転々とするが、1783年にフローレンスに至り、そこでイタリアの文学に親しむ。1785年フィレンツェで、サミュエル・ジョンソンの親友として知られるピオッツィ夫人 (スラール夫人)、ウィリアム・パーソンズ、バーティエ・グレートード (Bertie Greatheed, 1759-1826) らとともに *The Florence Miscellany* というイタリア詩の影響の濃い実験的な詩集を発表し、その一部はまもなくロンドンの *The European Magazine* 等で紹介された。そのメリーが1787年6月、ロンドンの日刊紙 *The World* の主幹編集者であり、ケンブリッジ時代の友人トップハム (Edward Topham, 1751-1820) の求めに応じて、*Della Crusca* のペンネームのもとに自分の詩 “The Adieu and Recall to Love” を寄稿する。「デラクルスカ」というのは、十六世紀、フローレンスで、ダンテやペトラルカの純粋なイタリア語を守ろうと結成されたデラクルスカ学会からとったものである。本来「クルスカ」というイタリア語は小麦のふすまのことで、よいパンを焼くため

にこれを取り除こうという意味を込めたものであった。メリーがこの名を名乗るのには、自らを「ふすま」と卑下するユーモラスな意図があったとダニエル・ロビンソンは指摘する (39-40)。劇作家として知られていたハナ・カウリー (Hannah Cowley, 1743-1809) は、デラクルスカの詩に強い印象を受け、すぐさま“To Della Crusca: The Pen”という詩を書きあげ、アナ・マチルダのペンネームで、同紙に投稿した。メリーはさらにこれに対し、“To Anna Matilda”という詩をしたため、これに応えた。

デラクルスカ派の詩の特徴として注目されるのが、この匿名によるメディア投稿によって、投稿者が虚構のペルソナを演じることで演出され、同時に、読者も巻き込むことで形成される劇場的ディスコースについてである。メリーは、後に女優と結婚し、劇作に筆を染めるが、ともに『フローレンス・ミスセラニー』を出版し、デラクルスカ詩投稿にも加わるバーティー・グレイティードも劇作家である。カウリーは、十八世紀末の有名な劇作家のひとりであり、ローラ・マリアの名でこの詩人たちに加わるメアリー・ロビンソン (Mary Robinson, 1758-1800) は、シェイクスピア『冬物語』パディータ役の名演で有名となり、そのために皇太子（後の国王ジョージ四世）に気に入られその愛人となった女優であった。また、ワールド紙の編集者トッパムの愛人であり、彼の編集作業を手伝っていたメアリー・ウェルズも人気女優であった。デラクルスカ詩にかかわる中心メンバーはほとんどが演劇にかかわる面々である。カウリー夫人は劇作家として、劇場情報やそのほかの話題のための情報が充実しているワールド紙を購読していたと思われるが、そこで目にしたデラクルスカの“Adieu and Recall”を読んで、彼女自身の演じたい自分ないし詩人としての新たな自分が目覚めたのだと考えられる。デラクルスカ詩研究において、女性詩人たちとデラクルスカ派について重要な一石を投じたジュディス・パスコーは、デラクルスカという主人公を取り込むことで、自分たちの役柄を演出してブームを形成することに果たした女性たちの貢献を指摘する(41-42)。最初にワールド紙に登場したデラクルスカの詩“Adieu and Recall”は、苦しみから逃れるためには恋愛を捨てなくてはならないが、そうした心の平安は空しいので、キューピッドよ、また恋をさせてくれと願う典型的な十八世紀末の感受性 (Sensibility) の詩であった。これは単に独白として語られていたのに対して、そのデラクルスカというペルソナに対する恋人役としてのマチルダというペルソナを作り上げ、両者の劇的な対話の場を演出したことは、カウリー夫人がデラクルスカのブームを作り出すうえでの大きな貢献であった。カウリーは、メリーのイタリア語

のペンネーム、デラクルスカに対し、ダンテの煉獄編に登場するマチルダの名を取り、アナ・マチルダを名乗った。両者は中世のロマンスの作中人物になりきり恋を語り始めたのである。想定されるのは、中世のトルバドルらからダンテに受け継がれた伝統で、宮廷愛について、詩人たちが切実な恋の思いを互いに語り合う伝統である。ただし、中世の詩においては高貴な女性に対する思いを語り合うのは男性同士であり、男女の間で直接恋歌を交わすことはなかった(McGann 81)。しかし、アナ・マチルダは男女があからさまにエロチックに愛を語り合うことを促したのである。女性の作家が男性と同じ場で作品を発表することが可能となった十八世紀末のメディア状況を活用してのパフォーマンスであった。この即興的かつ共時的に眼前で展開される恋愛ドラマに読者が熱狂するのは当然の成り行きで、まもなく、Emma や Rosaria など、おなじくイタリア風のペンネームを用いた一般の読者もこの投稿に加わり、またワールド紙のみならず、ロンドンのほかの新聞にも飛び火し、投稿恋愛詩のブームが起きた。そののち、このブームに加わることで自らの詩人としての認知を目指したメアリー・ロビンソンは、ペトラルカの詩における終生の恋人ラウラを踏まえて「ローラ・マリア」を名乗り、投稿する。彼女はデラクルスカ詩人のひとり “Arley” が女優時代に面識のあった劇作家マイルス・アンドリュース(Miles Peter Andrews, 1742-1814)であり、ワールド紙の編集にもかかわっていると知っており、アーリーが「ローラ」に捧げた詩に応える詩を送れば、デラクルスカ派の新メンバーとして迎えられると見込んでいたとダニエル・ロビンソンは推測する (49-50)。

ジュディス・パスコーは、「両詩人は互いの詩を湧きあがらせる力についてもっとも真摯に感じている、つまり、それぞれ互いに相手を刺激させ詩を書くように促す力に恋をしているのだ」と指摘するが (75-76)、アナ・マチルダは先に触れたデラクルスカの “Adieu and Recall to Love” という詩に対して、このように応えた。

ふたたびそなたの黄金の筆をつかみ、
そのペン先で私の胸を刺し、
魔法の手触りで私の心を探り、
熱情の涙を溢れさせよ！

O! seize again thy golden quill,

And with its point my bosom thrill;
 With magic touch explore my heart,
 And bid the tear of passion start.¹

「私の胸を刺し」、「手触り」、「探り」、「熱情の涙」といった言葉は、肉感的であり、極めて刺激的、大胆かつ挑発的である。そうしたマチルダの大胆さに対してクルスカは、そのような女性を待っていたとばかりにこう応える。

魔法の乙女よ、お前のことはよく知っている。
 お前がのどかな野原に遊ぶのを心にとめ、
 山のはるか頂にいるのを見た。
 夜中のあらしでお前と出会い、
 誰もいない砂浜を走り
 夕日を眺めるお前を知っていた。

I know thee well, enchanting Maid,
 I've mark'd thee in the silent glade,
 I've seen thee on the mountain's height,
 I've met thee in the storms of night;
 I've view'd thee on the wild beach run
 To gaze upon the setting sun . . .

感動を与える自然の事物の中に空想の人物を重ねたり、個人的な思い出を重ねる手法は、「ルーシー詩編」に代表されるようにワーズワースの詩の特徴である。クルスカは自然の感動の中にマチルダを置くことで、彼女が自分の心の奥底に大事にしまっていた理想の女性であると宣言しているのである。一方、アナ・マチルダは、そのデラクルスカの声を聞いたことで、新たな自分、新たな幸福と感動を見出したと歌う。

そなたが命じ、私の紫の眠りは飛び去る。
 陽光の輝きが私の目に注ぎ、

¹ 以下、デラクルスカ派の詩の引用は、別に示さない場合は、John Bell ed., *The British Album*, 2nd ed.よりのもので、拙訳を示した。

私は目覚め、私は生きる。この感動は
かつてのつまらない悲しみにはるかに勝る。

THOU bidst!--"my purple slumbers fly!"
Day's radiance pours upon my eye.
I wake--I live! the sense o'er pays
The trivial griefs of early days.

ハナ・カウリーはこれを書いた年には 44 歳、イギリスの演劇界でもっとも売れっ子の脚本家のひとりとして活躍中であった。しかしアナ・マチルダというペルソナのもとに自らの若々しい青春の声を見出し、いままでの自分をすべて捨て去り、舞台の上にデラクルスカの恋人として登場する。

何だというのだ。かつて私の頬のバラの蕾が
つややかに、若さと喜び、
罪や恐れや恥、不安なさを
伝えていたのが、今や散ってしまったとて。
私の花開く魂は若々しく
その生き生きとした感動が真実の証。

What! tho' the rose-bud on my cheek
Has shed its leaves, which late so sleek,
Spoke youth, and joy--and careless thought,
By guilt, or fear, or shame unmote;
My *blooming soul* is yet in youth,
Its lively sense attests the truth.

ハナ・カウリーは、詩人としてはマイナーな存在としての扱いしか受けていないが、彼女の他の詩と比べて、アナ・マチルダとしての作品ははるかに魅力的なものとなっている。カウリーはしばしば、デラクルスカへの返歌をすぐさま書き上げると述べているが、劇場のペルソナをまとうことは、このネットワークに参加する詩人としての創造性を刺激する効果があったのはあきらかである。同時にメディア上で進行する対話ゆえのハブニングもある。ローラ・マリア

の投稿詩に印象を強くしたデラクルスカは、アナ・マチルダが最近投稿していないとみて、Leonardo という別の名において投稿し、ローラに対して、駆け落ちしたいという願望を歌う。

ああ、そして私はあなたと残された唯一の
避難を試してみたいと思った。駆け落ちだ。
いろんな外国の土地をさまよい
私を引き裂く心配事を国に置いて。

Ah!, then, I thought with thee to try
The only refuge left—and fly.
On many a foreign shore to roam,
And leave my rending cares at home.

驚いたことに、別名によるこの詩を、ハナ・カウリーはすぐさま、デラクルスカのものとは見抜いてしまう。

はっ、私がそなたの顔の
心の姿がわからぬと思ったか。
そなたは厚く顔を覆えば、
デラクルスカの額を隠せると思ったか。

Hah! Did thou hope I should not trace
The mental features of thy face?
Did thou believe the thickset veil
Could Della Crusca's brow conceal?

詩の文体で作者を見破るのは、カウリーの詩の才覚の鋭さであろう。マチルダは、デラクルスカの浮気に腹を立てるわけだが、これにたいしローラことメアリー・ロビンソンは、クルスカはずっとマチルダのものよと彼女をなだめる詩を寄せる。そしてクルスカも「アナよ、私の愛があなたのように、不実をおかすなどありえようか」とふたたびマチルダへの愛を語る。このような共時的に予測不可能に発展するディスコースがまた、読者を自らそこへの参加者として

引き込むことになった。

(2) 出版メディアの確立

劇的な演出性ととともに、デラクルスカ派のメディア現象で注目したいのが、作家の身分、階層にかかわらず、だれでも参加が許された民主的なフォーラム、ハーバーマスの言葉で言えば公共圏としての新聞メディアという点である。克蘭チャーはエディンバラの雑誌 *The Bee* の創始者ジェイムズ・アンダーソンの 1790 年の言葉を引用して、雑誌メディアが異種の社会階層をひとつにする民主的な性質があることを指摘している。「すべての個人に作者となる自由がある所においては、書く機会の自由は雑誌媒体に民主的かつ共同体的な雰囲気を与える」(22-23)。より多くの人に情報を伝えるメディアの特質として、メディア上のディスコースを共有することで、読者層を一つに結び付けるということがあり、これは各階層に分断された社会に対し変革を迫る力となりうる。同じ議論の中で克蘭チャーは、新聞の読者の声欄は雑誌新聞の原点を表すものであり、新聞、雑誌は読者によって作られるものであったことを思い出させるものとしている。1731 年創刊の *Gentleman's Magazine*, 1741 年創刊 *Universal Magazine* から 1796 年刊の *Monthly Magazine* に至る月刊雑誌の伝統において、読者により投稿された論評の署名にローマ風のペンネームをつける慣習は、雑誌は読者が作るものという伝統に根ざしているという(Klancher 22)。確かに *Monthly Magazine* をみると投稿者は、“Mr. Urban” を名乗る編集者に対して、自分の署名をつけて投稿するが、そこには、イニシャル名や英語名に交じって、“Candidus,” “Eugenio,” “Otho”といったローマ風のペンネームが見られる。ワーズワースが 17 歳の時に *The European Magazine* に最初に投稿した詩 “Sonnet on seeing Miss Helen Maria Williams Weep at a Tale of Distress” は “Axiologus” というペンネームによるものであった。この名は「ふさわしい言葉を探す者」という意味と思われる。ちなみに若きワーズワースが心酔したヘレン・マリア・ウィリアムズは、フランス革命の支持者として、ジャコバン党支配下フランスで投獄されながらも『フランス革命書簡』を書き続けた著者として知られる詩人であり、デラクルスカ派とも交友のある存在であった。この伝統に照らしてみるとデラクルスカ派がイタリア風のペンネームを用いるのは、読者、作者、編集者が対等な関係においてかかわるネットワークを形成するというイギリス・メディアの伝統の現れと考えられる。

メディアの発達には社会階層をつなげるだけでなく、また女性作家をも、男性

と同じ場に引き出すことを可能にした。パスコーは、ピオッツィ夫人（スラール夫人）がサミュエル・ジョンソンらとの記録をつづったことで有名な日記『スラリアーナ』の1789年の記事の中で、感性に訴える詩の流行によって、学識を積む経験を与えられてこなかった女性たちにも詩人として平等に認められる場が与えられたと綴っていることを引用する(48)。十八世紀は、識字率が急速に高まった時代である。庶民においても都市の商店で働く者の大多数は読み書きができた。単行本の価格が高く、公共図書館がまだなかった時代、生活の余裕のある人々は、貸本図書館 (circulating libraries)、会員制図書館 (subscription libraries)、共同購入会 (book clubs)、コーヒーハウス、宿屋などで最新刊の図書や雑誌、新聞を手にすることができた。貸本図書館というのは、主に書籍販売業者が経営するもので、販売のための書店自体は店舗も小さく書架も少なかったのに対して、貸本図書館は広くゆったりとした閲覧室と多くの書架をそろえ会費を払った顧客のためにあらゆる種類の書籍をそろえていた。教会にも、娯楽作品はないものの図書室は珍しくなかった。また字の読めない庶民であっても、来客のため、あるいは人に読んでもらうために、図書を購入していた。民話やバラッドを口伝えて聴くのに代わって、図書の朗読がそれに代わって庶民の娯楽になっていった。こうして、書籍や新聞、雑誌の印刷メディアはますます大きな影響力を持つようになっていったのである (156)。

読書人口が増え、雑誌等の読み物や記事の需要が高まるにつれて、だれもが作家になれる道が開かれた。ワールド紙の場合のジョン・ベル (John Bell, 1745-1831) のように新聞や雑誌と書籍の刊行は、しばしば同じ業者が担っていたため、投稿やなどを通じてうまく出版者に取り入れることができれば誰にでも作家の道が開かれていた。それにより生活をたてることも可能となった時代である。1760年代までに、エッセイ、批評、詩などの記事を掲載する雑誌はロンドンに30以上あった。十八世紀末になるとその数は80ほどに上った (Brewer 123)。窮乏のうちに17歳で自らの命を絶ったトマス・チャッタートンに見るように三文文士の生活は悲惨であったが、うまく雑誌と契約して継続的に記事を書けるようになるか、あるいは編集者に抜擢されれば、安定した暮らしを立てることも可能であった。その中で、女性作家の活躍は特に注目に値する。1990年代に入って、ドイツでマイクロフィルム化されたコルヴァイ・コレクションがイギリス・シェフィールド大学図書館によって購入され、英語圏研究者たちに知られるようになると、このコレクションが、十八世紀～十九世紀初期の文学史の書き換えを迫る大発見であることが徐々に知られるようになる。コルヴ

アイ・コレクションとは、ドイツ、ウェストファリア州の貴族ランドグラフ家の収集した約7万冊の図書で、このうち十八世紀末から十九世紀初期の英語文学は、1,250人の作家による3,250冊に上る図書であるが、このうち、女性作家による著作は1000冊を超え、女性作家の数は420人を数えた。コルヴァイ・コレクションは当時ヨーロッパで流通していた文芸書を広範囲で集めたもので、この時代の文学状況のよいサンプルと考えられる。つまりここから当時の流行作家の三分の一は女性であったことがわかるのである。ハナ・モア、シャーロット・スミス、アン・ラドクリフ、メアリー・ロビンソンら、職業として著作を行っていた作家も少なくなかった。詩や小説を求める旺盛な読者の需要を背景に、十八世紀末までに新聞、雑誌、書籍出版による印刷メディアは、その影響力を確立していったのである。

2. ロマン派詩への影響

ジェローム・マクガンは、*The Poetics of Sensibility: A Revolution in Taste* (1996) において、ワーズワースらロマン派詩人らの登場に先立って、感性の詩人たちにこそ、現代的文学感性に向けての革命的变化が見て取れることを論じて、デラクルスカ詩について、ロマン派研究者たちに再考を迫った。シルビア・ボルドーニは、バイロンの初期の詩において、デラクルスカ派の影響が顕著に見られることを指摘する。彼女が引用するバイロンのデビュー作 *Hours of Idleness* (1807) に収められた次の短詩に見るように、語り手が恋愛ドラマの主人公を演じるかのような劇的な口調により、自らを演出しているところは、先に紹介したデラクルスカとアナ・マチルダのやり取りに見るとおりである。また、“beauteous,” “plenteous” といった形容詞を多用するところも、クルスカ派の特徴として有名である。

君は思うか、君の美しき瞳が
涙にあふれ、行くなと乞い、
そして君の大きなため息が
言葉尽くせぬ思いを語るに、わが心動かぬと。

Think'st thou, I saw thy beauteous eyes,
Suffus'd in tears, implore to stay;

And heard unmov'd, thy plenteous sighs,
Which said far more than words can say? (“To Caroline”)

バイロンは後に自分の作風からこのようなセンチメンタリズムを隠そうとするが、語り手を劇中主人公として演出するような特徴は『貴公子ハロルドの巡礼』に見るように、バイロン詩の特徴として引き継がれる。また、イタリア詩を斬新な形で英語詩に取り入れて、異国情緒とともに、会話的な文体で読者を引き込むという特徴はデラクルスカ派と共通する点である。

ジョン・キーツがメアリー・タイ(Mary Tighe, 1772-1810) の “Psyche; or, The Legend of Love” (1805) に影響を受けていることは知られているが、最近発表されたアシュリー・クロスのメアリー・ロビンソン研究は、有名なキーツの「ナイチンゲールへの頌歌」(1820) が、メアリー・ロビンソンによる二編の“Ode to the Nightingale”の意図的な書きなおし(“an implicit reworking”)であるとしている(234-35)。ロビンソンは美人女優として知られていたが、二十代のころよりリュウマチに悩み、進行的に体が不自由となり、四十歳余りでその生涯を終える。彼女の「ナイチンゲール」二編は、病の中で生きることの苦痛を受け入れることがテーマであり、その主題は結核を発病した後にキーツの書いた “Ode to a Nightingale” と重なる。キーツの詩にはロビンソンの詩からの数々のエコーが聞き取れる。ロビンソンが “In the dark wood and moss-grown cell” (暗い森と苔むした洞窟) というのに対してキーツは、“Through verdurous glooms and winding mossy ways” (緑の暗がりとうねった苔の道) と歌う。また、ロビンソンの “that plaintive Song of Care” (あの悲しい心痛の歌) に対し、キーツは “thy plaintive anthem fades” (お前の悲しい歌が消えてゆく) と応える。そしてロビンソンの “Deceitful HOPE, e’en there I found” (偽りの希望よ、そこにさえ私は) あるいは、“And LOVE, a false delusive flame” (そして恋、偽りの幻の炎) に対してキーツは、“Adieu! the fancy cannot cheat so well/ As she is fam'd to do, deceiving elf” (さらば! 空想は、讃えられているほどにうまくは騙せない。いつわりの妖精よ) と彼の詩の最後に語る。両者のこのような呼応関係はキーツがロビンソンの詩を繰り返し耳にし、親しんでいたことを示している。

メアリー・ロビンソンは、ワーズワース、コールリッジによる *Lyrical Ballads* (『抒情民謡集, 1798 年』) に感銘を受けて、彼女の遺作となる詩集に *Lyrical Tales* というタイトルをつけた。ワーズワースと同じく、貧しい村人、ジプシー、黒人の少女など、社会の片隅に生きる人々に思いを寄せた詩を集めたものである。

ワーズワース自身は、ロビンソンがワーズワースを意識した題名を付けたことに対して、不本意に感じていたようである。たとえそうだとしても、片方に影響されて生まれた作品が全く無関係なものであるはずはない。つまりワーズワース自身による詩にもロビンソンの詩と同じ要素が息づいているはずである。それが感受性 (Sensibility) と呼ばれる感性である。

3. 感受性の文学

(1) 感受性の思潮

十八世紀後半の文学の大きな流れとなったのが、感受性 (Sensibility) という感性であるが、これはジャン・ジャック・ルソーのように人間を人間足らしめているのは感情であるという、感情を重視する考え方である。恋愛の情、恐怖、憐憫、共感の喜び等の個人として経験する感情に注目することであり、一方ではゴシック小説におけるような恐怖の念を味わうことであり、他方では、当時一世を風靡したローレンス・スターンの *A Sentimental Journey Through France and Italy* (『センチメンタル・ジャーニー―ヨーリック師のフランスとイタリアを巡る』, 1768 年) に見るように物事に対する個人的な感想に共感するという鑑賞の仕方に現れる。

ウィリアム・ワーズワースが最初に雑誌に発表した詩 "Sonnet on seeing Miss Helen Maria Williams Weep at a Tale of Distress" (「ヘレン・マリア・ウィリアムズが悲しい話に涙するのを見てのソネット」) は、まさしくそうした感受性の詩である。

彼女は泣いた。人生の紫の潮流が
しびれる静脈をけだるい流れで満たし、
あふれる涙で目はかすみ、脈拍は止まりそうだった。
胸はいっぱいにあふれ、甘味な痛みにつつまれた。

SHE wept.--Life's purple tide began to flow
In languid streams through every thrilling vein;
Dim were my swimming eyes--my pulse beat slow,
And my full heart was swell'd to dear delicious pain.
(*European Magazine*, 40 [1787]. Signed "AXIOLOGUS")

ここに歌われているのは、ヘレン・マリア・ウィリアムズが自分の詩を朗読しつつ涙を流すのを見た詩人が、そこに共感し、ともに涙を流す経験である。

アナ・マチルダに最初に、直接的な反応を呼び起こし、デラクルスカ派のブームの引き金を引いたのがデラクルスカこと、ロバート・メリーの感受性を歌ったこの詩である。

ああ、このように安逸を吹聴することは、
 味わうべき熱い情熱もなく、
 甘味な孤独の感も知らず、
 人の喜びに、人の悲しみに
 凍てついた無感覚を覚えること、
 悲しい心の空虚さを覚えるためか？

Alas! Is all this boasted ease,
 To lose each warm desire to please,
 No sweet solicitude to know
 For other's bliss, for others' woe,
 A frozen apathy to find,
 A sad vacuity of mind?
 (DELLA CRUSCA "The Adieu and Recall to Love," 1787)

クルスカは恋愛の苦しみを避けるためにキューピッドと別れる決心をするが、そのことが心の死を意味すること知り、それを撤回し、ふたたび恋を求めるという歌である。ここに歌われているのは他者への共感こそが人間として生きることの証であるという考えである。

(2) 感受性の文学とイデオロギー

十八世紀の女性作家の多くは、女性が学ぶことを奨励する非国教会派プロテスタントの出身で、それゆえ、奴隷制に反対でホイッグの支持者が多かった。十八世紀末から十九世紀初期に活躍した優れた女性作家たち、シャーロット・スミス、アナ・レティシア・バーボルド、メアリー・ロビンソン、ヘレン・マリア・ウィリアムズ、アメリア・オーピーらは、みな作品中での社会的弱者への共感という点で共通点を持っている。自ら反奴隷制、共和制支持、フランス

革命への共感を示すか、あるいはそうした人々と深いつながりを持っていた。これらの作家の背景にあるのはシャフツベリー伯の思想にある、残虐な行為をなんとも思わなかった過去の人類とは対照的に、人間は他者に対し共感することを学ぶことによって文明化するという考え方である。奴隷として人間性を否定されている人々に対して同じ人間として迎え入れるという姿勢にそれは現れる。また、フランス革命の理想である、「自由、平等、友愛」は、人類が互いに同じ感情を有する同胞であるという考えに基礎をおいており、その実現には共感の力が必要とされるのである。他者への共感により痛みも喜びも共有すること、戦いでなく友愛、野蛮で残虐な慣習から文明の人間的な感情へと促す価値観である。

しかし、十八世紀末の文化状況において重要なのは、このような思潮そのものに加えて、それが印刷メディアによって、作者、読者に広く共有されるという現象であるとジョン・ブリュワーは指摘する。「共感による繋がりを結ばせ、著者と読者に同様に感受性の感覚を湧きあがらせる感情的な仕組み」であり、他の読者も同時に作者の気持ちを共有しているという意識に注目する。ここにおいてメディアにより、人々が感情を一つにするという現象が初めて出現するという歴史的な転換点が見られるのである。デラクルスカ派は、それまでの感傷的な文学以上に、一つのネットワークとして作者と読者を一つするという意味で、感受性の文学の社会的影響を一步推し進めるものとなっている。

1790年代に入ると、イギリス国内において、フランス革命への反動的な動きが起こり、自由思想への攻撃が強まる。同時に女性の社会参加や社会的言動を抑制しようとする動きが顕在化してくる (Behrendt 40-41)。1791年暴徒による、科学者であり自由思想家ジョセフ・プリーストリーのバーミンガムの教会や家屋が暴徒によって焼き討ちになった事件、ギフォードによる *Baviad* や *Maviad*, リチャード・ボルウェル (Richard Polwhele, 1760-1838) による *The Unsex'd Females, a Poem* 『女性を捨てた女たち』(1798) のような反フェミニストの諷刺詩により女性作家への逆風は強まる。ワーズワースを含めて、批評家として、あるいは詩人として尊敬されていたアナ・レティシア・バーボルドが1812年、“Eighteen Hundred and Eleven”という300行を超える長詩を発表し、ナポレオン戦争のさなか、イギリスの自由言論、自由精神が廃れてゆく現状を批判的に描くと、各方面から散々な攻撃を受け、彼女はその後、生涯自作の詩を発表することがなかった。

デラクルスカ派の詩は十九世紀以降、感傷的で下手な詩の見本として顧みら

れることがなかった。しかし 1996 年、ジェローム・マクガンは、それは、けっして文学的な表現力に劣るからではなく、読者や批評家がそうした感受性の文学を鑑賞のしかたを忘れてしまったからだと論じた。その後、過去 20 年、女性詩人、女性作家たちの再評価が進められ、デラクルスカ派の一人、メアリー・ロビンソンも含めて、デラクルスカ派、および感受性の女性詩人たちの重要性が認められつつある。最近発表されたアシュリー・クロスのメアリー・ロビンソン研究においては、ロビンソンがクルスカからの詩人のネットワークに加わる中で自らの詩人としての声を見出し、さらにコールリッジやワーズワースらとの詩的対話によって自らの詩を発展させていったとしている。そしてそうした詩人同士の対話をロマン派詩発展のプロセスの重要な特徴であるとして、ロビンソンをロマン派詩人たちの先駆者として評価している。

ロビンソンやハナ・カウリーに決定的な影響を与えたデラクルスカこと、ロバート・メリーの詩人としての才能についても、決して見過ごすことはできない。そこで、なぜこれらの詩人たちが、これほどに忘れ去られ、顧みられなくなったのかという疑問が出てくる。ウィリアム・ギフォードは、1791 年に発表した風刺詩 *The Baviad* においてクルスカを痛烈に皮肉ることでこの影響を葬り去ろうとした。実際にはデラクルスカ派の恋歌を集めた *The British Album* は、1793 年までに第 4 版、さらにアメリカ版へと版を重ねていることを見てもギフォードによって、その影響力を失ったとはいえないであろう。1789 年、フランス革命がおこるとロバート・メリーは、この自由、平等、友愛こそが自らの詩人としてのより重要な理想として、マチルダとの恋歌に関心を失ってしまう。女性詩人たちを束ねる中心を失ったデラクルスカ派は自然に消滅せざるを得なかった。メリーは、1790 年に「フランス国民議会に捧ぐ」として発表した 700 行に及ぶ長詩『自由の桂冠』(*The Laurel of Liberty: A Poem*) において、恋歌から自由への主題に向かう気持ちについて、「かつてのようにカウリーの優美な額に月桂樹と銀梅火 (ビーナスに捧げられる花) を編み合わせ、彼女の豊饒な歌を神々しい陶醉で味わう」よりも、「より高貴な大いなる主題が息を吹き込み、／愛は理性の純粋な炎の中に消え」、そして「真実の光が広がる夜明けを前に／新たな光が不名誉な闇を消し去り、急ぎ、熱き詩句を編むのだ」と述べる (47-56 行)。²

² Strachan 199-200. ストラカン編の *British Satire 1785-1840*. 第 4 巻は、デラクルスカ派の詩についての現代の版としては、もっとも多くを収めている。ここでのメリー、およびロビンソンからの引用は本書からのものである。

ギフォードが『バヴィアッド』そして『マヴィアッド』(1795)により執拗にデラクルスカ派を攻撃した理由については、研究者の意見が分かれる。ゲイマーは、『バヴィアッド』がすでに新聞紙上でデラクルスカ派の詩がすでに発表されなくなった頃になって発表された理由として、ハナ・カウリー、メアリー・ロビンソン、ロバート・メリーらの詩が、出版者ジョン・ベルによって立派に装丁された単行本として出版されることで、これら詩人の文学的権威が形成されることへの警戒があるとしている(110-111)。しかしストラカンが指摘するように、ギフォードの攻撃の背景にあるのは「高度にイデオロギー的な動機」であろう(xviii)。つまり、メリーが1790年に『自由の桂冠』を公にするや否やロビンソンは『世界はかく進む』(*Ainsi va le Monde*)という詩でこれに応え、フランス革命を讃えたことが契機となっているのである。ギフォードにとって、ワールド紙上の恋愛歌のネットワークが、フランス革命擁護、イギリスの政治改革の運動へと拡大することが最大の懸念だったことは間違いない。しかしながら、ギフォードの風刺を待つまでもなく、イギリスの反ジャコバン空気が勢力を増し、メアリー・ロビンソンは革命でなく女性や社会弱者への共感へと焦点を変え、メリーは、フランスとの戦火の中、イギリスから追われ、アメリカへ旅立ち、短い生涯を終えることとなる。

メリーは、『自由の桂冠』でこう歌う。

情けを知らぬ支配者よ！石と鉄の心よ！
 お前たちは他人の気持ちを顧みず、
 力に国の傲慢、力におぼれ、
 自らの小さき存在を偉大と呼び、己惚れる。
 わが歌はたとえか弱くも
 エネルギーの火花を呼び覚まし、
 自然の普遍的秤の前には
 ひとりひとり等しく釣り合う。
 自然の女神は、違いなどないと宣言した、
 支配するものと血を流すものとの間に。

Yet ruthless Rulers! hearts of stone and steel!

Ye, who can never heed what others feel,

But swol'n with pow'r, and insolence of state,

Presume to call your little selves, the great!
 Yet shall my song all feeble tho' it be,
 Awake the latent spark of energy;
 And shew, in Nature's universal scale,
 That each with each must equally prevail,
 That she no real difference decreed,
 'Twixt those that dominate, and those that bleed . . . (339-348)

メリーの詩には感受性のイデオロギーと平等思想、民主主義との関係が明瞭に現れている。「他人の気持ちを顧みない」者は「感受性」のない、「石と鉄の心」を持つ残虐な者であり、逆に他人への感受性があり、他人の気持ちがわかる者は、人はすべて同じであり、平等であることを理解する。メリーの「エネルギーの火花」に触発されたメアリー・ロビンソンは、バスチーユの襲撃について、こう歌って応える。「自由の女神の息吹に温められて、支配され震える群れは／みじめな無感覚の眠りより目覚め、／抑圧に揺り動かされ、人は生まれながらの権利を求める。／高慢な要塞の上に赤き復讐の炎が燃え上がる」(243-46)。「無感覚」であったものが自由の女神に温められ、感覚を取り戻すと、「人としての生まれながらの権利」を取り戻そうと動き出す。やはり、「感覚」は平等性と密接につながっている。このバスチーユの蜂起の情景は、ギフォードら、イギリスの体制につく側には悪夢として映ったであろう。

感受性とは、同じ気持ち、感覚が人々の間で共有されることを意味する。その共感がメディア上で実現されるとき、人々は、階級や社会階層、性差を超えてその感覚を共有することになる。そこには読者として結ばれた人々の間に疑いのない平等の意識が立ち現れることになるのである。

しかしイギリスはルイ十六世の処刑後、交戦状態となり、イギリス国内の共和思想、民主思想は厳しく弾圧されてゆく。その中で感受性についても、その政治的な側面については厳しく制限が加えられるようになる。フランシス・ジェフリー (Francis Jeffrey, 1773 -1850) は、イギリスで最も権威のある批評誌として認知されることになる『エディンバラ・レビュー』の1803年の創刊号において、ロバート・サウジーの『破壊者サラバ』を取り上げる、そしてその作品について論じる前に、コールリッジとともに同じ「湖沼詩人」の仲間数えられていたワーズワースが『抒情民謡集』につけた序文について、その「理論」を攻撃する。ワーズワースはそこで、感受性の詩の伝統を引き継ぎ、羊飼い、

村の子ども、ホームレスなどの人物に共感する詩を載せているわけだが、これに対しジェフリーは、「教養、教育のある人物の愛、悲しみ、憤慨は、道化師、物売り、街の女たちの愛、悲しみ、怒りとは、別の言葉によって表現されるのみならず、それ自体全く異なった感情なのである」と切って捨てる (66)。貧しい人々と共感し、同じ感情をもつ、同じ人間であると認めることは、すなわち社会階級を否定する民主思想につながるからである。イギリスとフランスはナポレオンの失脚後、国交を回復するが、ナポレオン戦争の終結後は、イギリス国内で政治改革を求める声が高まる。しかしこの声に対して、イギリス政府は1817年の人身保護令状停止法など、抑圧をもって答える。政治改革法案が成立するのは1832年のことである。そして英仏開戦から政治改革法制定までの40年間の間に、フランス革命時の平等の理想、感受性、感性の文学の受け止められ方は変質してしまっていた。十九世紀後半になって、生前には批評家たちから散々に批判されたシェリーやキーツがもてはやされるようになった時、それは政治的な意味合いを抜き取った新たな形での受容によるものであった。

本論は、十八世紀末新聞紙上におけるデラクルスカ派の恋愛詩ブームについて、それを当時の印刷メディア発展によるメディア現象としての側面、感受性 (Sensibility) の思潮およびロマン派に通じる文学史としての側面、そして、これらの両側面、すなわちメディア性と感受性の文学が孕むイデオロギー的側面について、これらを十八世紀末当時の女性作家とジェンダー、フランス革命とを背景とした言説の中において、相互の関係について互いに光をあてようという試みであった。感受性の文学というのは一見、極めて個人的な主題で、公的なメディアとも、フランス革命をめぐる政治的言説とも遠いところにあると思われるが、実は、メディア状況、政治言説とは切り離せない現象であった。十八世紀末に活躍した多くの女性作家たち、そしてロバート・メリーとデラクルスカ派の存在が文学史においてなぜ忘却されていったのか、それは十九世紀以降、感受性の文学の意味が失われていった過程にかかわる問題であるが、これはさらなる検証が求められる課題であろう。

参考文献

- Barker, Hannah. *Newspapers, Politics and English Society 1695-1855*. Pearson Education, 2000.
- Behrendt, Stephen C. *British Women Poets and the Romantic Writing Community*. Baltimore: Johns Hopkins UP, 2009.
- Bell, John, ed. *The British Album*. 2nd ed. Vols. 1, 2. John Bell, 1790.
Internet Archive.
 <<https://ia902300.us.archive.org/11/items/britishalbumcon00merrgoog/britishalbumcon00merrgoog.pdf>>
- Bordoni, Silvia. "Lord Byron and the Della Cruscans." *The Byron Study Centre*.
 <<http://www.nottingham.ac.uk/z-olddsites/crlc/documents/byronessays/lordbyronandthedellacruscans.pdf>>
- Bostetter, Edward E. "The Original Della Cruscans and the *Florence Miscellany*." *Huntington Library Quarterly* 19 (1956): 277-300.
- Brewer, John. "Sentiment and Sensibility." *The Cambridge History of English Romantic Literature*. Ed James Chandler. Cambridge UP, 2009. pp. 21-44.
- . *The Pleasures of the Imagination: English Culture in the Eighteenth Century*. 1997. Routledge, 2013.
- Clark, Steve. "'Amphibious Grown': Hester Thrale, Della Crusca and the Italian Origins of British Romanticism." *British Romanticism in European Perspective: Into the Eurozone*. Palgrave Macmillan, 2015.
- Clifford, James L. "Robert Merry--A Pre-Byronic Hero." *Bulletin of the John Rylands Library* 27 (1947): 74-96.
The Corvey Project at Sheffield Hallam University
 <<https://extra.shu.ac.uk/corvey/intro/index.html>>
- Cross, Ashley. *Mary Robinson and the Genesis of Romanticism: Literary dialogues and debts, 1784-1821*. Routledge, 2017.
- Curran, Stuart. "Romantic Poetry: The I Altered." *Romanticism and Feminism*, ed. Anne K. Mellor. Bloomington: Indiana UP, 1988. 185-207.
- Feldman, Paula R., ed. *British Women Poets of the Romantic Era: An Anthology*. Baltimore: Johns Hopkins UP, 1997.
- Gamer, Michael. *Romanticism, Self-Canonization, and the Business of Poetry*. Cambridge UP, 2017.
- Gravil, Richard. *Wordsworth and Helen Maria Williams; or, the Perils of Sensibility*. Humanities-Ebooks, 2010. Kindle.

- Hardgreaves-Mawdsley, W. N. *The English Della Crusicans and Their Time 1783-1828*. The Hague: Martinus Nijhoff, 1967.
- Jeffrey, Francis. "Thalaba, the Destroyer: A Metrical Romance. By Robert Southey." *The Edinburgh Review*, 1 (1803): 63-83. HATHI TRUST Digital Library
 < <https://catalog.hathitrust.org/Record/000530182>>
- Klancher, Jon P. *The Making of English Reading Audiences, 1790-1832*. Madison: U of Wisconsin P, 1987.
- Labbe, Jacqueline M.. *The Romantic Paradox: Love, Violence and the Uses of Romance, 1760-1830*. Macmillan, 2000.
- McGann, Jerome. *The Poetics of Sensibility: A Revolution in Literary Style*. Oxford: Clarendon P, 1996.
- Mee, Jon. "The Political Showman at Home: Reflections on Popular Radicalism and Print Culture in the 1790s." in Michael T. Davis, ed., *Radicalism and Revolution in Britain, 1775-1848*. London: Macmillan, 2000. 41-55.
- , *Print, Publicity, and Popular Radicalism in the 1790s*. Cambridge University Press, 2016.
- , "'Reciprocal expressions of kindness': Robert Merry, Della Cruscanism and the limits of sociability." in Gillian Russel and Clara Tuite, eds., *Romantic Sociability: Social Networks and Literary Culture in Britain, 1770-1840*. Cambridge: Cambridge UP, 2002. 104-122.
- Morison, Stanley. *John Bell, 1745-1831: Bookseller, Printer, Publisher, Typefounder, Journalist, &c.* Cambridge UP, 1930. Rpt. 2009.
- Pascoe, Judith. *Romantic Theatricality: Gender, Poetry, and Spectatorship*. Cornell UP, 1997.
- Raven, James. *Publishing Business in Eighteenth-Century England*. Boydell & Brewer Ltd. 2014.
- Robinson, Daniel. *The Poetry of Mary Robinson: Form and Fame*. Palgrave Scholarly Books, 2011.
- Robinson, Mary. *Selected Poems*. Ed. Judith Pascoe. Broadview, 2000.
- Scrivener, Michael, *Poetry and Reform: Periodical Verse from the English Democratic Press, 1792-1824*. Detroit, MI: Wayne State UP, 1992.
- Smith, Orianne. *Romantic Women Writers, Revolution, and Prophecy: Rebellious Daughters, 1786-1826*. Cambridge: Cambridge University Press, 2013.
- Strachan, John, ed. *British Satire 1785-1840*. Vol. 4. *Gifford and the Della Crusicans*. London: Pickering and Chatto, 2003.
- Topham, Edward, ed. *The Poetry of the World*, Vol. 1. John Bell, 1788. Google Books.

本研究は JSPS 科研費 JP16K02493 の助成を受けたものです。